『与えられた賜物は違っていても…』

'22/08/28

聖書個所：エペソ人への手紙 4 章 7-10 節（新約 p.377）

先週まで、私たちは、エペソ 4:1-6 のみことばから、「教会が持っているべき一致」について学びました。神様が私たちクリスチャンに平和を与え、イエス様を信じ救われた者すべてをキリストに似た者へと変え続けていってくださるのだから、必ず、そこには一致があるべきだというような内容でした。…そうでしたよね？

命題：神が与えてくださった賜物とは？

でも、それに続く、今日のみことばをご覧くださいますと、『しかし、…』という言葉で、今日のみことばは始まっています。確かに、私たちクリスチャンには、数多くの共通点があります。皆、同じ神様によって救われ…、同じキリストのからだに属し、同じ希望を持ち、また、究極的には同じ目的…、つまり、私たちの創造主なる神様の栄光を現わしていくという目的のために生かされています。

しかし、それと同時に、私たちクリスチャンには幾つかの違いもあります。その1つが、今日皆さんと学ぼうとしている聖霊の賜物なのです。でも、そこには、素晴らしい神様の恵みというか…、神の御計画があるのです！今日は、神様が与えてくださった賜物とはどのようなものなのかということを、皆さんとご一緒に学んでいきたいと思います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、エペソ 4:7-10 をお開けください。初めに、今日皆さんと学んでいくみことばをお読みします。

7 しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。
8 そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」
9 ――この「上られた」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということでなくて何でしょう。
10 この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです―

Ⅰ・賜物は、すべて のクリスチャンに与えられている！（7 節）

まず、ここで1番最初に教えられていることは、聖霊の賜物は、“すべて”のクリスチャンに与えられている、ということです。イエス様を信じて救われた者の一部…、つまり、特定のクリスチャンたちにだけ、この聖霊の賜物というものが与えられているということでは決してなく、すべてのクリスチャンたちに！「聖霊の賜物」というものが与えられているのです。

ここ 7 節には、『しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。』とあります。ここには、「めいめい、おのおの、それぞれ…」と訳されるべき言葉（ἑκαστος）が使われてあります。でも言うまでもなく、これは、決して、「すべての人間のこと」を指しているのではありません。そうではなく、クリスチャンたち一人ひとりを指しているということは、この4章全体の文脈を見れば、誰の目にも明らかなはずです。…ですから、4:1 を見ても、『召されたあなたがたは…』というような表現があるわけです。つまり、ここの文章は、明らかに、救われたクリスチャンたちを対象に書かれてあるわけなのです。

そのみことばが、イエス様を信じて、キリストの体に属する者とされた者たちの全員に、この聖霊の賜物というものが、もう既に与えられている！と教えるのです。

さて、ここ 7 節のみことばは、『…キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。』と教えてくれています。ここで、『恵み』（χάρις）と訳されてある言葉は、ギリシヤ語の「カリス」という言葉なのですが…、皆さん、この日本でも、時々、「カリスマ～」というような言葉を聞くことがありますでしょ？「カリスマ美容師」とか、「カリスマ店員」などと言うそうですが、所謂、多くの人を魅了するような…、特殊な才能や技能を持った人物に対して、このようなカリスマという言葉を使って表現するみたいですが…、その、「カリスマ」という言葉の語源でもあるのです。…つまりは、素晴らしい能力が与えられた！ということなのです。

また、ここ 7 節には、その『恵み』を説明する言葉として、『キリストの賜物の量りに従って…』という表現が使われてあります。ここの表現は、その与えられる賜物が、キリストのもの…、つまり、「キリストの所有である」ということが教えられています。つまり、イエス様が、御自分の持っておられる賜物を…、イエス様御自身の意志によって、私たちクリスチャンに分け与えてくださった、ということなのです。だから、8 節でも、『彼（＝イエス様）は…人々に賜物を分け与えられた。』とあるのです。

つまり、ここにおられるクリスチャンの皆さんには、一人残らず、イエス様が分け与えてくださった賜物というような…、一種の才能（＝能力）が与えられているのですが、それは、私たちが持って生まれたものではなく…、皆さんがイエス様を信じて、救われた瞬間にイエス様が分け与えてくださったものなのです。

時々、私たちは間違った謙遜から、「私は何もできないから…」と言ってしまったり、いろいろな言い訳をしてしまったりして、せっかく、イエス様が与えてくださった賜物を用いようとしないことがあります。しかし、明らかに、そういった態度は神様の前に喜ばれるものではありません！私たちは、せっかく、神様が与えてくださった賜物というものを、十分に活用していくべきなのです！…ですよね？

Ⅱ・一人ひとりには、異なった 賜物が与えられている！（7-8 節）

そうして、その次に教えられてあることは、クリスチャンの一人ひとりには、それぞれ“異なった”賜物が与えられている、ということです。

今さっき見た 7 節のみことばは、『しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。』ということを教えてくれています。先程も言いましたように、ここには、「めいめい、おのおの、それぞれ…」と訳されるべき言葉（ἑκαστος）が使われてあります。実は、この言葉は、「すべての者に…」という意味だけでなく、「それぞれに違った…」という意味も含まれている言葉なのです。もしも、今日のみことばが、救われたクリスチャン全員に同じ賜物が与えられているということを教えたかったのなら…、このような言葉や表現を使うことなく、「私たちは皆…」というような表現を使ったはずです。しかし、実際はそうではなく、先程もお話しした通り、ここ 7 節では、『しかし…』というような、逆説的な接続詞が使われてあることからも明らかなように、私たちに与えられた賜物には、それぞれ…、違いがあるのです。

また、ここ 7 節には、『キリストの賜物の量りに従って…』という表現が使われてあります。実は、ここの文章は主語がはっきりとしていません。3人称単数形、つまり、「彼が与えた…」とは教えられているのですが、具体的に、その主語…、つまり、「誰が与えてくれたのか？」ということが説明されていないのです。しかし、そのことは少し後の 11 節になると明らかにされてあります。11 節に、何とあります？⇒『こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。』…このように、イエス・キリスト御自身が、賜物とその賜物を活用するための奉仕の働きをも、一緒に与えてくださったのだ、ということが分かります。

つまりね、皆さん…。皆さんに賜物を分け与えてくださったのは、他ならぬ、イエス様御自身なのです！…私たちはつい、何となく、スロットマシーンがグルグルと回るような…、そのようないい加減な決定によって、私たちに賜物が与えられたとイメージしてしまうかも知れませんが、聖書は決してそうは教えません。すべてを御存知で…、最善をなしてくださるイエス様の御配慮によるものだと、みことばは教えるのです！

例えば、皆さんは、あの…、ルカ 19 章に出てくるザアカイの話をよくご存知ですよね？…あの時、一体どうして、イエス様は、ザアカイの所にお泊りになられたのでしょう？⇒答えは簡単です。イエス様は、ザアカイのことをよーく知っておられたからです。「ザアカイ」という名前だけでなく、ザアカイにとって本当に何が必要であったのかも…。それと同じように、イエス様は、ここにおられる私や皆さんの必要や、何が私たちにとっての最善であるか、ということも御存知なのです。

ですから、私たち…、決して、こうは言えません…。「神様、どうして、私に、あんな賜物を与えてくださらなかったのですか！私には、神様の奉仕をするために…、必要な能力（＝賜物）がありません！無理なのです！」って…。だって、神様は、私たちの必要すべてを御存知で、もう既に、それにふさわしい賜物というものを与えてくださっているからです。…そうじゃありません？

どうぞ、今度は、そのすぐ後の8節をご覧ください。『そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」』⇒ここのみことばをご覧くださったら分かる通り、鉤カッコが付いています。これは、どこかからの引用だということです。…実は、ここは、詩篇 68:18 からの引用なのですが、ちょっと、皆さんは、このまま…、エペソ 4:8 をご覧になっていてくださいます？私は今から、詩篇 68:18 を読んでみますので、皆さんは、どこが違うかを探してくださいます？詩篇 68:18、『あなたは、いと高き所に上り、捕らわれた者をとりこにし、人々から、みつぎを受けられました。~~（頑迷な者どもからさえも。神であられる主が、そこに住まわれるために。）~~』

⇒いかがですか？どう違っていました？全く同じでは無かったでしょ。当然、よく似た内容ではありましたが…。しかし、最後の部分が、一見、正反対のようなことを言っていたことに気付いてくださいました？つまり、エペソ 4:8 では、『賜物を分け与えられた。』とあるのに、詩篇 68:18 では、『みつぎを受けられました。』とあったでしょ？つまり、エペソ書では「与えた」とあるのに対し、詩篇では「受けた」とあるのです。一見、正反対のように見えますでしょ。

でも実は、こういったことは、この当時の習慣を知れば、特に問題にはなりません。実は、この当時、戦に出て、勝利して帰ってきた時に、このような凱旋（＝勝利した戦のパレード）がなされたのです。…その時、勝利した国の人々は、負けた国の人々や戦利品を持って帰ってきます。…ここでは、そういったことについて言われているのです。…つまり、勝利者が戦利品を得たり、多くの人たちからみつぎを受け…、今度は、それを多くの人たちに分け与えるという構図が、詩篇やエペソ書で説明されているわけなのです。

つまり…、ここでパウロが言わんとしていることは、「イエス様は、もう既に勝利してくださった！」ということなのです。…だから、私たちは、そのごほうびにあずかることができるというわけなのです。…聖書を開けてくださらなくて結構ですが、Ｉコリント 15:54-56 には、イエス様が十字架の死から復活されたことによって、イエス様は死に対しても…、また、罪に対しても、完全に勝利してくださったのだ！というようなことが教えられてあります。そのような勝利者であられる、イエス様が私たちに勝利の記念というか…、その証拠として…、そして何より、私たちの信仰生活の具体的な助けとして、賜物を与えてくださったのです！

じゃあ、ここ 8 節で言われている、『高い所に上られたとき…』というのが、何を意味しているのか？いつのことなのか、ということに関しては、大きく分けて、2つの説があります。1つは、イエス様が死後3日目によみがえられた後、一時期、天に昇られたとされる、その時だという説と、もう1つは、イエス様が大勢の者たちが見ている前で昇天された時のことです。その2つのいずれかであるのは多分間違いないのですが、その…、どちらを指しているのか、正直、私にははっきりと断定するだけの確信がありません。

しかし、いずれにせよ、イエス様が死や罪に対して勝利されたことは間違いありません！だから、イエス様は、約束通り、聖霊なる神様を、この地上に遣わしてくださったのです！どうか、ヨハネ 16:4-7 のみことばを思い出してみてください。『4 しかし、わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、その時が来れば、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。わたしが初めからこれらのことをあなたがたに話さなかったのは、わたしがあなたがたといっしょにいたからです。 5 しかし今わたしは、わたしを遣わした方のもとに行こうとしています。しかし、あなたがたのうちには、ひとりとして、どこに行くのですかと尋ねる者がありません。 6 かえって、わたしがこれらのことをあなたがたに話したために、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。 7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。』

このように、イエス様は予め、ちゃんと約束してくださっていたのです。イエス様が去られた後…、代わりに、聖霊なる神様という御方を遣わすって。その少し後の 13 節に、はっきりと、『しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。…』とあって、その『助け主』が、聖霊なる神様である！ということが説明されてありますでしょ？

それでは、その聖霊を受けると、その人はどうなるのでしょう？⇒どうぞ、Ｉコリント 12:4-11 をご覧ください。『4 さて、賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。 5 奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。 6 働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。7 しかし、みなの益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。 8 ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、 9 またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ、 10 ある人には奇蹟を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。 11 しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。』

このように、みことばは教えます。『御霊』…、つまり、聖霊なる神様が、皆さんの内に住んでくださるようになった…、その瞬間に、皆さんには、個人個人違った、『御霊の現れ』…、つまり、聖霊の賜物が与えられるのです！

どうぞ、今度は、ローマ 12 章をご覧くださいます？そこでは、そういった賜物が個人個人によって違っているということが繰り返されてあります。ローマ 12:3-10、『3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。 4 一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、 5 大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。 6 私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。 7 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。 8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれをしなさい。 9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。 10 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。』

ここでも、先程読んだみことばと同じようなことが教えられてあります。…私たちは皆で、1つのからだを構成しているのです！って…。例え、1つの体であっても、そこには当然、目もあれば、口や耳もあります。手があれば、足だってあります。それと全く同じように、私たちも、同じ1つの体であるからこそ…、逆に、全く同じ働きをしないのです。私たちは皆で、同じ1つの体を構成しているからこそ！そこに、全く同じような働きがないのです！1つの体なのに…、同じ働きばかりがある…、皆が目であったり、皆が足であったりというのは、明らかにおかしいでしょ！体としては、ある意味、不完全じゃないですか！

実に、簡単なことです。しかし、私たちはそういったことを教会の中に適用しようとすると、時々、間違ってしまうことがあるのです。民主主義の原則、あるいは、極端な平等主義とでも言うべきかも知れません。教会の中で、ある人が熱心に奉仕しておられるのを見て…、「これはおかしい！不公平ではないか！」と考えてしまうのです。…皆さんもそんな風に思ってしまうことがありませんか？

先程読んだみことばに、何とありました？⇒『6 私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。 7 奉仕であれば奉仕し…』（ローマ 12:6-8）とありましたでしょ！

つまり、私たちは、与えられた賜物を用いて、熱心に奉仕すべきなのです！他人と比べて…なんて、全く必要ありません！ひょっとしたら、私たちは思ってしまうかも知れません、「あの人ばっかり！（とか）どうして、自分ばっかりが！（あるいは）いつも、一部の人たちだけだよねー…」なんて…。でも、その人が、自分に与えられた賜物が、『分け与える』賜物であると思うなら、『惜しまずに分け与え』れば良いのです！そう、みことばが教えるじゃないですか！…自分には、『指導する』賜物が与えられていると思うのなら、みことばは『熱心に指導』しなさいと教えます！あるいは、自分には、『慈善を行う』賜物が与えられていると思うなら、みことばは『喜んで』しなさいと教えるでしょ？私たちは、それぞれが心から感謝して、自分に与えられた賜物を用いれば良いのです。

だって、そうでしょ？例えば、牧師や長老たちには、『教える』という賜物と働きとが与えられています。…だから、牧師や長老は、熱心に教えるべきだし、そういった働きをする時に、神様から喜びや祝福といったものを与えられるはずです。例えば、Ⅰテモテ 5:17 に、『よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。』とある通りです。

例えば、皆さん、牧師に対して、「もう、先生。あまり教えないでください。あまり、主が与えてくださった賜物を用いないでください！」とは言わないでしょ。…なのに、私たちは時々、同じようなことを、教会員に対して、「あの人ばっかり、特定の奉仕をし過ぎている！いっつも、自分ばかりが頑張っている…」と考えてしまうことがありません？確かに、そういった奉仕をしてくださっている方が疲れたり、重荷に感じたりしておられるのなら、話は別です。そのような場合は、その重荷を軽くしてあげて、一緒に助け合うことが必要です。…しかし、もし、そうでないなら…、喜んで、与えられた賜物を活用して、必要な奉仕をおられるのなら、私たちもそれに見習うべきですよね！

そうして今度…、「自分には、どんなことができるだろうか？自分は何をするべきだろうか？」ということを考えつつ…、どうか周りを見渡してみてください。多分、あなたができること…、神様が望んでおられることがあるはずではないでしょうか？

例えば、皆さん。ジグゾーパズルって、ご存知ですよね？その1つ1つのピースだけを見ると、何てことのない…、ただの「1ピース」にしか過ぎません。しかし、そういったピースが集まって、完成すると、私たち、感動させられません？今日の個所で、みことばが教えていることも同じではないでしょうか？

皆が違うのです！しかし、違うからこそ、そういった部分が集まって、1つのパズル…、1つの体が構成されているのです！…もし、パズルの1ピースが抜けていたら、どうでしょう？例えば、それが 100 ピースのパズルだったら、私たちの感動は、“1/100 だけ…、つまりほんの 1%だけ”少なくなるのでしょうか？⇒違いますでしょ？恐らく、私たちの感動は、半減すると思います。…いえ！ひょっとしたら、そこから伝わってくる感動よりも、1ピース足りないことの疑問や喪失感の方が大きいのかも知れません。「どうして、このパズルには、ここのピースが抜け落ちてしまっているのだろう、なんて…ね！

それほど…、ここの教会にとって、皆さんの存在や働きは大きいものなのです。…じゃあ、皆さんは何か奉仕をしておられます？…みことばが教えてくれる奉仕は、先程にも見たように、ここの教会が募集している奉仕とは少し違うように思います。ローマ 12:7 で教えられてある『奉仕』…、これは、仕えることや給仕、接待のことです。また、それに続いて…、教えること、勧めをすること、分け与えること、指導すること、慈善など、それ以外にもあるでしょう…。あなたがすべきこと…、あなたにしかできないことが教会にはあるのです。どうぞ、そういったことを探しつつ…、ここでの教会生活を送っていっていただきたいと思います。

Ⅲ・他者の 必要 を満たすために与えられた！（9-10 節）

最後に、私たちが、聖霊の賜物に関して見ていきたいのは、その賜物が与えられた目的です。賜物は、私たちが“他の人たちの必要”を満たすために与えられたのです。

パウロは教えます。今日のみことばの 9-10 節で、『9 ――この「上られた」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということでなくて何でしょう。 10 この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです――』⇒ここで、パウロは何のことを言っているのでしょう？

①1つは、イエス様がへりくだってくださった…。神であるイエス様が、自ら、仕える者となってくださった！ということです。…そうですよね？でも、そのイエス様が「上る」ためには、一旦、「下らない」といけない…という話をパウロはしているわけです。

②もう1つは、そのイエス様があるべき位に戻られた…ということです。…だから、ここ 10 節でも、『この下られた方自身が、…もろもろの天よりも高く上（のぼ）られた…』とあるのです。今、私は意図的に…、ある部分を読み飛ばしたことに気付いてくださいました？

イエス様は、ただ何となく、上られたのではありません。そこには、ちゃんとした目的があったのです！ここ 10 節には何とありました？⇒『すべてのものを満たすために…』とみことばは教えます。ここ 9 節と 10 節とは、8 節の説明です。…つまり、8 節で、「イエス様が昇られて…、人々に賜物を分け与えられた」という話がなされているわけですが、その理由は、「すべてのものの必要を満たすためであった」からなのです！

だって、ついさっき、私たちが確認したように…、イエス様がこの地上を去って、その代わりに聖霊なる神様が下ってきてくださることは、私たちクリスチャン『にとって益なのです』（ヨハネ 16:7）と、イエス様はおっしゃってくださったじゃないですか！つまり、イエス様は、私たちのために…、私たちに聖霊を送るためにも、天に昇っていってくださったのです。

良いですか、皆さん。繰り返しになりますが、聖霊の賜物は、ここにおられる…、クリスチャンの皆さんに必ず与えられています。しかし、その目的はあなた自身の必要を満たすためでもないし…、もちろん、あなたが称賛を浴びるためでもありません。あなたが、その賜物を用いて、他の方を助け、他の人の必要を満たすために、イエス様は皆さんに賜物を与えてくださったのです。

どうか、もう1度、Ⅰコリント 12 章のみことばを、ちょっと長いのですが、重要なみことばなので紹介させてください。さっき見たところの続きである、Ⅰコリント 12:12-27 にこうあります。『12 ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。 13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。 14 確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。 15 たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。 16 たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そん

なことでからだに属さなくなるわけではありません。 17 もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょう。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょう。 18 しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。 19 もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょう。 20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。 21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うこともできません。 22 それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。 23 また、私たちは、からだの中で比較的に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、 24 かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。 25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。 26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。 27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。』

⇒このように、イエス様は、からだ全体が調和するように…、また、それだけではなく、お互いに、労わり合うことができるように…、すべてのことを考えた上で、私たちに1番ふさわしい賜物を…、また、奉仕の働きを与えてくださっているのです。

＜励ましの言葉＞

皆さんはご存知ですよね？この当時のコリントの教会は、ある意味、礼拝や奉仕に関して、非常に熱心でありました。…でも、その態度（心）は、神様の前に正しいものではありませんでした。一体、どうしてでしょうか？⇒ Ⅰコリント 14:5 に、何とあります？『私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいますが、それよりも、あなたがたが預言することを望みます。…』…コリント教会のメンバーの多くは、異言を語ることに魅力を感じ、異言することを熱心に求めたのです！だから、パウロは、Ⅰコリント 12 章で言うのです！『もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょう。』（Ⅰコリント 12:19）、『みながいやしの賜物を持っているでしょうか。みなが異言を語るでしょうか。みなが解き明かしをするでしょうか。』（Ⅰコリント 12:30）って…。

当時のコリント教会の間違い…、その1つは、自分のことばかり考えていたということです。当時のメンバーたちは、他の者たちの必要ではなく…、自分のしたい奉仕…、人から注目を浴びる奉仕などに関心が行ってしまっていたのです。だから、パウロは言うのです。Ⅰコリント 14:6、『ですから、兄弟たち。私があなたがたのところへ行って異言を話すとしても、黙示や知識や預言や教えなどによって話さないなら、あなたがたに何の益となるでしょう。』って…。

つまり、教会全体の益となること…、他のクリスチャンとの調和…、弱い者たちを労わるような、そんな者となっていきなさい、というのです。ひょっとしたら、そういったことって、あまり目立たないかも知れません…、多くの人が気付いてくれないかも知れません。多分、感謝のことばやねぎらいの言葉が無いのかも知れません。しかし、私たちクリスチャンは、神様に…、イエス様に従っていくことで、喜びを感じることができるし、感謝できるのです。…問題なのは、私たちが、神様ではなく…、人を見てしまうことです。人から感謝されたいとか…、人から注目されたい…、人と比べたりする時に、問題が起こってくるのではないでしょうか？

どうか、イエス様がそうであられたように…、私たちも、神様だけを見上げていくことができますように…。また、自分自身の欲や自分の必要を満たすためにではなく…、他の人の必要を満たし、他の人の益となることを率先していくことができますように…。もし、この教会の皆さんがそのように願われるなら、必ず、聖霊なる神様はあなたに助けを与えてくださいます。

そうして、この教会は、ますます、全体としての調和がとれて、教会全体として成長させられて、また、神様からの祝福を受けて、この世の中にあって、「現代における、生けるキリストのからだ」としての働きをますます、全うしていけるのではないでしょうか？…最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。